

Eureka XII

六年制通信 No.34 令和7年1月17日(金)号

言葉に酔わない

始業式で念を押すのを忘れました。終業式でお願いした「松阪の名物」ですが、考えてくれましたかな。三都の名物のようにリズムよく作ってくれると嬉しい。ついでにうちの学校の名物も、六年制だけでいいからね、考えてくれると有り難い。君たちが小学生の子たちやその親御さんに自分の学校を（もちろんいいところをいいところだけでいいから）説明するならどうするかを考えてほしいのです。よろしくお願いします。

さて、今回は昔々のマッカーサーの発言について *ad fontes*（原典に当たって調べる）の大切さを強調しましたが、私たちはよく確かめもせず、特にカタカナ語を使う場合が結構ありますね。日本人の悪い癖だと私は思うのですが、言葉に酔うところがありますよね。スローガンに弱いと言いますか、あまり意味が判然としない用語を無批判に使う、しかも有識者と呼ばれるような人たちでさえ使用しているのを見かけます。カタカナ語が実は和製英語と知らずに英語話者を相手に使ってみたり、かなり恥ずかしい場面がテレビで放映されています。こっちが赤面します。

これは一見英語らしく聞こえるだけに危険だと思うのですが、皆さんご存じの「グローバルスタンダード」という言葉ね、あれ、英語ではないのですよ。『現代用語の基礎知識』には「グローバルスタンダード」は和製英語であるとはっきり書いてあります。ですから野球の「ナイター」（英語では「ナイトゲーム」）が英語話者に通じないように、「グローバルスタンダード」も英語話者は「何ですかそれ？」みたいな受け止め方をするでしょうね。前回紹介した多賀さんの本には、故石原都知事が2001年のダボス会議でアメリカを批判して「グローバルスタンダードはアメリカンスタンダードではない。それを知って、世界によき影響を与えてほしい」と言ったという話が紹介されています。そして、石原さんの発言はアメリカ人にはピンと来なかっただろうと多賀さんは言います。なるほど、和製英語を使われてもアメリカ人は困りますよね。石原さんの発言は意味不明だったことでしょう。カタカナ語の中にはもっともらしく聞こえるのが時々ありますからね、私たちも気をつけないといけません。

私は以前より「グローバル教育」という言葉に日本の教育界が酔っているように思えてなりません。これ、実体のあるようでないような、そもそも何を指しているのかよくわからない言葉だと思いませんか。なぜこの言葉をそんなに有り難がるのか、私には全く理解できません。しかし、多くの学校の教育目標には「グローバル教育」だの「グローバルな人材の育成」だの「世界に通用する若者を育てる」だの、そんな文言が溢れています。そして、それらの学校のホームページには英語教育に力を入れて

いること、外国の姉妹校との交換留学制度があることなどが続きます。要するに、英語を勉強することが「グローバル教育」だとしか読み取れないのですが、「世界に通用する若者」というのは英語のできる若者のことなののでしょうか。

このあたり、何か大きな誤解があるように思います。まず言葉の問題として、世界に通用する「若者」とか「人材」というのが曖昧です。普通、私たちのことを世界の人々は「日本人」と認識します。私たちの教育は「世界に通用する日本人」の育成であると、これならわかります。具体的にどのような知識を必要とするかがはっきりしてくるからです。前にも書いたかもしれませんが、世界をオーケストラに例えた比喻があって、バイオリンとビオラとチェロの音色を同時に出せる楽器をオーケストラは必要としません。オーケストラという世界に必要なのはバイオリンとして、ビオラとして、チェロとして一流の音色の出せる奏者なのです。つまり日本人なら日本人として、イギリス人ならイギリス人として考え行動できる、そういう若者が世界に求められる人材です。要するに、自国の文化や伝統、考え方、行動の規範、そういうことをよく知っていることが必要なのです。もし君に、世界の人々が聞きたいと思うことについての知識があれば、向こうは君のつたない英語に耳を傾けてくれます。聞くに値する知識があるかどうかが重要なのです。私は学生時代、君は日本人かと聞かれイエスと答えると「三島由紀夫の切腹を日本人はどう捉えているのか」と質問されたことがあります。日本人なら答えを持っているはずだと。さて、君ならどう答えますか？

今週のおすすめ

・下村敦史 『アルテミスの涙』 (小学館文庫)

「閉じ込め症候群」という病名を初めて知りました。眼球と瞼しか動かせなくなるらしい。本の帯の「まばたきが告発する」という文句が面白くて手に取りました。長期入院中の「閉じ込め症候群」の女性患者愛華が容態を崩し、産婦人科の医師水瀬が診察すると何と妊娠していることがわかります。明らかに暴行以外考えられないわけで、完全な事件です。犯人の特定には患者の協力が必要なわけですが、意思疎通は困難です。それでもイエスかノーで答えられる質問を駆使することで、彼女のまばたきが徐々に真相を明らかにしていきます。「君を妊娠させたのは主治医の高森先生ですか」という問いかけに、反応はイエス。驚愕する病院関係者。そりゃそうですわな。高森医師は逮捕され、両親は子どもを産まないように愛華を説得というか恫喝しようとしします。しかし水瀬医師が文字盤を使って辛抱強くコミュニケーションをとるうちに意外な真相がわかってきて…。これ、私、途中で真相がわかりました。ネタバレまではいかないだろうと思うので、ちょっとおかしいと思った点を言えば、文字盤を使ったコミュニケーションを主張したのは水瀬なのですね、産婦人科医の。それを脳外科医で愛華の主治医が考えつかないはずがないですもんね。

愛と命の物語には違いないのですが、何が正しくて何が間違っているのか簡単には決められないテーマで、それだけに非常に人間らしい苦悩だと言えますね。

BGMは Little Glee Monster の *Break out of your bubble* でした…。